選考委員代表　**渡辺 利夫**

第18回樫山純三賞は、2022年4月から2023年6月までに日本国内で発刊されたアジア関連図書を対象とし、そのうち最も優れた学術書と一般書にこれを授与するというものです。本年度も学術書27冊、一般書14冊、両部門に共通するもの5冊、計46冊の応募がありました。いずれもレベルは高くどれを授賞作とするか審査員は熟考を重ね、ようやく結論にいたったことを初めに申し述べておきます。

選考委員会は7月7日に開かれた第1次選考会において対象作を12点に絞り、6人の審査員がそれぞれ複数冊を分担して夏休みの期間中にこれを読み込み、8月31日の最終選考会では長時間に及ぶ熱い議論を経てようやくにして結論を出すにいたりました。

受賞作は、学術書としては金悠進（きむゆじん）さんの『ポピュラー音楽と現代政治―インドネシア 自立と依存の文化実践』（京都大学学術出版会）、一般書としては猪俣哲史（いのまたさとし）さんの『グローバル・バリューチェーンの地政学』（日経BP 日本経済新聞出版）を選び、審査員全員の合意となりました 。この2著作につきましては、2人の審査員が講評を書き、全審査員にこれをメールで回覧し審査員がさらに筆を入れ、このパンフレットの中に掲載されております最終的な講評となりました。お読みくださればありがたく存じます。

金悠進さんの著作は、インドネシアを対象とし、ポピュラー音楽と政治との関係について考察するという過去に研究例の少ない分野に切り込んだ意欲作です。スカルノ・スハルト時代の後の民主化時代において、政治と音楽との関係は複雑化し、一方で反権力を掲げる自立的な音楽実践者が政府批判を展開すれば、他方では著名歌手が政界に進出して権力を握ったり、さらには社会派のミュージシャンが支持者を公然と応援するといった実に複雑な様相を呈するにいたりました。

こうした政治と音楽との錯綜した関係性を規制する法案として2019年に議会に上程されたのが「音楽実践法案」と称する非民主的なルールでした。これに反対する諸勢力の強い反発を招いてこの法案が撤回されるという経緯をたどったというのです。本書はなぜこのような政治と音楽との複雑な関係がインドネシアで生起しているのか、その文化的背景に著者自身の体験をもからませて迫った力作です。日本のインドネシア研究もここまでの深まりをみせているのかと思わされる秀作でもあります。

猪俣哲史さんの著作は「グローバル・バリューチェーン」（GVC）と呼ばれる世界的な価値ネットワークが、現代世界の安全保障に大きな影響を及ぼしつつあるという現象に強い関心を寄せておられます。

現代の世界におきましては、例えば私どもが毎日使っている車なども万を超える半導体、その他の部品、中間製品から成り立っております。この生産を一国内で自己完給することは不可能です。それぞれの生産適地でそれらをつくり、これを集めて完成品にする。そのためのサプライチェーンが成り立っております。そしてその規模もGVCと呼ばれるような規模に達しています。この事実が各国の安全保障にも重大な影響を与えないはずはない。猪俣さんは、国民の生存や財産を守護するものは国家のみだという発想から離れ、GVCが世界の安全保障のありように大きな影響を及ぼすにいたった経緯を論じ安全保障とGVCとの関係を地政学の観点から考察しようとする雄大な構想から生まれたものが本書です。

この2著作以外にも本年度は優秀作が多く、最後の最後まで受賞作候補として審査委員会の場で話題になったのは、学術書では、櫻田智恵さんの『国王奉迎のタイ現代史』（ミネルヴァ書房）、一般書では、城山英巳さんの『天安門ファイル』（中央公論新社）の2つであったことを申し添えておきます。

受賞された執筆者の一層のご精進、アジア研究に関する著作の出版に精出してくださっている出版社のご尽力に対し深く感謝を申し上げる次第であります。